

【旧約聖書日課】ルツ記 1章1～18節 朗読なし

【使徒書日課】使徒言行録 11章4～18節

4そこで、ペトロは事の次第を順序正しく説明し始めた。5「わたしがヤッファの町にいて祈っていると、我を忘れたようになって幻を見ました。大きな布のような入れ物が、四隅でつるされて、天からわたしのところまで下りて来たのです。6その中をよく見ると、地上の獣、野獣、這うもの、空の鳥などが入っていました。7そして、『ペトロよ、身を起こし、屠って食べなさい』と言う声を聞きましたが、8わたしは言いました。『主よ、とんでもないことです。清くない物、汚れた物は口にすることがありません。』9すると、『神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言うてはならない』と、再び天から声が返って来ました。10こういうことが三度あって、また全部の物が天に引き上げられてしまいました。11そのとき、カイサリアからわたしのところに差し向けられた三人の人が、わたしたちのいた家に到着しました。12すると、「霊」がわたしに、『ためらわないで一緒に行きなさい』と言われました。ここにいる六人の兄弟も一緒に来て、わたしたちはその人の家に入ったのです。13彼は、自分の家に天使が立っているのを見たこと、また、その天使が、こう告げたことを話してくれました。『ヤッファに人を送って、ペトロと呼ばれるシモンを招きなさい。14あなたと家族の者すべてを救う言葉をあなたに話してくれる。』15わたしが話しだすと、聖霊が最初わたしたちの上に降ったように、彼らの上にも降ったのです。16そのとき、わたしは、『ヨハネは水で洗礼を授けたが、あなたがたは聖霊によって洗礼を受ける』と言っておられた主の言葉を思い出しました。17こうして、主イエス・キリストを信じるようになったわたしたちに与えてくださったのと同じ賜物を、神が彼らにもお与えになったのなら、わたしのような者が、神がそうなざるのをどうして妨げることができたでしょうか。」18この言葉を聞いて人々は静まり、「それでは、神は異邦人をも悔い改めさせ、命を与えてくださったのだ」と言って、神を賛美した。

【福音書日課】ルカによる福音書 17章11～19節

11 イエスはエルサレムへ上る途中、サマリアとガリラヤの間を通られた。12 ある村に入ると、重い皮膚病を患っている十人の人が出迎え、遠くの方に立ち止まったまま、13 声を張り上げて、「イエスさま、先生、どうか、わたしたちを憐れんでください」と言った。14 イエスは重い皮膚病を患っている人々を見て、「祭司たちのところに行って、体を見せなさい」と言われた。彼らは、そこへ行く途中で清くされた。15 その中の一人は、自分がいやされたのを知って、大声で神を賛美しながら戻って来た。16 そして、イエスの足もとにひれ伏して感謝した。この人はサマリア人だった。17 そこで、イエスは言われた。「清くされたのは十人ではなかったか。ほかの九人はどこにいるのか。18 この外国人のほかに、神を賛美するために戻って来た者はいないのか。」19 それから、イエスはその人に言われた。「立ち上がって、行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。」

神を賛美するために【こども説教のために】

弟子たちの教会の中心メンバーであるペトロが、ヤッファという港町に滞在していたときの事です。昼食前の時間で、空腹を憶えながら祈っていると、彼は、不思議な幻を見ました。天から大きな布のような入れ物が下りて来て、その中にはさまざまな動物や鳥が入っていました。どれも、ペトロたちユダヤ人ならば決して食べないものばかりです。ところが、天から声が聞こえたのです、「ペトロよ、身を起こし、屠って食べなさい」と。ペトロは、断りました。それは、食べてはいけないと教えられてきたものばかりだからです。けれども、天からの声は続けて言うのです、「神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言うてはならない」と。三度も同じ幻を見た後、ペトロは、ローマ軍の百人隊長コルネリウスに招かれて、彼を訪ねました。コルネリウスは、ローマ人で、ユダヤ人が食べないものも食べていましたが、神を畏れ、信じていました。ペトロは、そのとき、主イエスがコルネリウスをお招きだと信じて、彼に洗礼を授け、教会の仲間を迎えたのです。

ペトロの記憶には、主イエスがだれをも仲間を迎えられた事々が去来していたことでしょう。重い皮膚病の人、サマリアの人。皆が招きに応じて仲間になったわけではありませんでしたが、主イエスは、今まで仲間とは思われていなかった人を、いつもお招きでした。それは、不思議な経験でした。確かに奇跡のようなことでした。招かれた者が仲間に加わったとき、皆の者が神を賛美し、感謝しないではいられなくなるような経験だったのです。

戻ってきた者

愛する皆さんに、あらためて、「おかえりなさい」とご挨拶しましょう。みなさんは、一週間ぶりに、数週間ぶりに、あるいは数か月ぶりに、日曜日の教会に戻って来られました。神を賛美するために日曜日の教会に戻って来られた皆さんを、わたしは、「おかえりなさい」とお迎えします。

たとえ、今日はじめておいでの方がいらっしゃっても、そう申し上げるでしょう。はじめての方も、きっと、日曜日の教会をすでに遠めにご覧になられていらしたに違いないからです。あの、十人の重い皮膚病の人たちが、主イエスの道行かれるのを見つけて、**遠くの方に立ち止まったまま…「イエスキさま、先生、どうか、わたしたちを憐れんでください」**と心の叫びを上げたように、教会にはじめておいでになれる方は、それまで遠くの方に立ったままで、心の求めを天に向けていらしていたのに違いありません。

主イエスは、わたしたちにおっしゃるのではないのでしょうか、「そういう人たちが十人いても、ここに戻って来るのは一人だけだ。あとの九人は、どこにいるのだろうか」と。

あの十人の重い皮膚病の人たちは、主イエスが道中に立ち寄ろうとした村で、真っ先に出迎えました。なぜ、主イエスを真っ先に出迎えたのが、そらゝいもそらゝって重い皮膚病の人たちだったのでしょうか。それは、彼らが、村はずれに隔離されて集団で生活していたからです。古今東西、感染症を患った者は一様に、そのような扱いを受けてきました。村人の中には身内の者もいたでしょうから、その憐れみによって、わずかな食事は届けられていたでしょう。しかし、それは、わずかに死を引き延ばすのに役立つ程度のものにすぎません。病を回復させるのに十分な食事が与えられるようなことは、ほとんどなかったでしょう。ですから、彼ら病者たちは、ときおり村に立ち寄る旅人にも、精いっぱいの憐れみを乞わずにはいられませんでした。**声を張り上げて、「…どうか、わたしたちを憐れんでください」**と。

十人は、同じ村の出身者たちだったのでしょうか。そうではなかったかもしれない。少しでも村人の与えてくれる憐れみの手厚い村を求めて、彼らは集まって来ていたのかもしれない。同じ境遇の者同士、助け合い、いたわり合うこともあったでしょう。けれども、彼らは、自分たちの病が癒されたとき、もはや一緒である理由はありませんでした。

一人は、あの人のところ、主イエスのいらっしゃるところへと、戻ってきました。他の者たちは、わかりません。それぞれが、それぞれの行く道を選んだのでしょうか。ただ、戻ってきた者だけが、一つのことを知っていました。自分たちの病が癒されたのは、あの人が目に向けてくださり、「**祭司たちのところに行くように**」とおっしゃってくださったからだ、ということ。

「あなたの信仰があなたを救った」

皮膚病を患った者は、回復したかどうかを、祭司たちに見せて診断してもらっていました。祭司が治癒の診断を出せば、その者は、社会生活に戻ることができる。「律法」がそのように定めていました（レビ記 13～14 章）。現代人には不思議な定めのように思われるかもしれませんが、わたしたちとて、病気になったときには、医者に診てもらい、最終的には医者に「すっかり治りました」と言ってもらって、やっと安心して日常生活に戻って行ったりするのですから、大差ありません。

とは言え、ユダヤ人の間で、この定めがどれだけ実践されていたのでしょうか。あの主イエスのところに戻ってきた一人は、**サマリア人だった**とされていますが、彼らも同じ「律法」を重んじる人々でした。サマリア人にも、自分たちの祭司がいました。十人の者たちは、「**祭司たちのところに行きなさい**」と主イエスに言われて、それぞれに、自分の民の祭司のところに向かったのでしょうか。そして、祭司たちのところに行き着く前に、彼らは、自分が清くされ、癒されたことを知った、というのです。

実際に彼ら十人が、祭司のところに行ったのかどうか、わかりません。行ったかもしれないし、行かなかったかもしれない。行く前に清くされ、癒されていたら、「もはや祭司に診てもらう必要はない」と考えた者もいたのではないのでしょうか。わたしだったら、自分の病気が明らかに快癒していると思えば、あらためて医者のお墨付きをもらいに病院に行ったりしません。

肝心なことは、彼ら十人は、清くされ、癒された、ということです。しかも、主イエスが何かをしてくださったわけでもない、ということです。またしても主イエスは、病人の患部に手を置くのでもなく、癒しの祈りをしてくださったのでもない。ただ、彼ら病んだ者たちに目を向けられて、「**祭司たちのところに行って、体を見せなさい**」と、「律法」の定めをお告げになられただけでした。彼らは、清くされ、癒されましたが、主イエスに清められ、癒されたのではなかったのです。

「**あなたの信仰があなたを救った**」。主イエスは、またしても、そうおっしゃいます。「あなたが救われたのは、あなたの信じることによってなのだ」と。

彼らは、主イエスの言葉を信じて、立ち上がり、祭司のところに向かったのです。「信じること」を、彼らは始めました。否、主イエスが、彼らに「信じること」を始めさせられたのです。彼らのことを「信じること」によって。

人を「信じること」ができるのは、なんと幸いなことでしょうか。これほど大胆なことは、神を「信じること」なしに、だれも為し得ません。だからこそ、「信じること」を知った者は、神を賛美せずにはられないのです。神を賛美する者たちのもとに、戻って来ないではられないのです。